島根の中山間地から Work as Life

第９回
「これでいいのだ」

野中 浩一

タモリ

笑っていいとも、世にも奇妙な物語、ミュージックステーション。私が子どもの頃から見ている番組たち。私の中に、タモさんの番組は長寿というイメージがある。

物心がつき、気がついたらサングラスのおじさんが司会する番組を見ていた。流行り廃りの激しい芸能界の中で、まったく流行りも廃りも感じさせない飄々とした存在に見えていた。

たけし、さんまとともに「お笑い BIG3」という括りで TV に出ていることがあったが、私はこの 3 人が一括りで並んでいることを不思議に思っていた。タモリにジャンルがあるのか、よく分からなかったからだ。

興味が湧いて、戸部田誠著「タモリ学」を拝読。

タモリとその周辺の歴史を緻密に掘り起こし、興味深いタモリ自身の言葉が数多く記述されていた。その中から 3 つほど紹介したい。

お笑い芸人が、本来真面目な人間にもかかわらず、お笑いでアホなことをするギャップに年を追うごとに耐えきれなくなることに触れて「俺は〝お笑い〟が自分の存在と同じだから」「不真面目な人がものすごく不真面目なことをやっているんです」「最強。存在と考えが同じだからね」

『いいとも』新レギュラーに「コツはね、はりきらないこと」とアドバイスし、また「関係あることばかりに集中したら面白くもなんともない」(中略)「やる気のある奴っていうのは、中心しか見てないんだよね。お笑いっていうのは、大体周辺から面白いものが始まってくるじゃない」

漫画家の故赤塚不二夫への弔辞より「あなたの考えは、すべての出来事、存在をあるがままに、前向きに肯定し、受け入れることです。それによって人間は重苦しい意味の世界から解放され、軽やかになり、また時間は前後関係を断ち放たれて、その時その場が異様に明るく感じられます。この考えをあなたは見事にひとことで言い表しています。すなわち『これでいいのだ』と」

不便と不安

郵便物が以前より届くのが遅い。生活範囲内のコンビニがいくつかつぶれた。問い合わせの電話をかけてもコールセンターや自動音声案内に繋がることが多い。

サービスの質が低下している実感がある。けっこう不便に感じている。

自治会の戸数が 36 戸から 31 戸に減った。今ある 31 戸の中でも会に出られない家や高齢ひとり暮らしの家も少なくない。人口減少の影響で縮小・統廃合する保育園や学校が身近にある。

地域の活気が減っていく感触がある。けっこう不安に感じている。

家は介護で忙しい。仕事は人手不足で忙しい。そんな話がよく耳に入るようになった。

表 1　年代別人口（総務省統計局ホームページより）

	15 歳未満	15～29 歳未満	30～49 歳未満	50～64 歳未満	65 歳以上
1978 年 （昭和 53 年）	約 2771 万人	約 2636 万人	約 3495 万人	約 1624 万人	約 992 万人
2000 年 （平成 12 年）	約 1847 万人 （▲924 万人）	約 2570 万人 （▲66 万人）	約 3361 万人 （▲134 万人）	約 2691 万人 （1067 万人）	約 2201 万人 （1209 万人）
2022 年 （令和 4 年）	約 1450 万人 （▲1321 万人）	約 1819 万人 （▲817 万人）	約 3107 万人 （▲388 万人）	約 2496 万人 （872 万人）	約 3624 万人 （2632 万人）

住んだことなきわが家

2023 年 3 月下旬、私と妻と娘 2 人と、熊本県の山鹿市を巡った。野中家が先祖代々住んでいる家があった場所を訪ねる旅である。

私は 45 歳ながら、これまで自分の祖先や家のことを知る機会が少なかった。

本家を父が売ってしまったのは 38 年前。私が小学校に入って間もなくのこと。長男である私はまだ物心がついたばかりで、父の転勤により全国を転々としている中での実家の売却であった。

祖父母が早くに亡くなったこともあり、熊本の家には物心つく前に 1〜2 回行ったきりである。2 年前に亡くなった私の父は、家や家族や親せきについて、何も語ってこなかった。ごたごたやどたばたがあって家を出たと、うっすら知るくらいである。

父については第 2 回で書いたとおりであるが、田舎での暮らしや農業およびそれを強制しようとする家に嫌気がさして、放蕩の末に管理職サラリーマンとして退職まで全国転勤する生活を送ってきた。そのため熊本の生家や親せきとの付き合いは家・土地の売買やお金のことに限られていたと思われる。

私は、家・土地や祖先や親せきのことをほとんど知らない中で、野中家の成り立ちを調べるために、家族とともに熊本へ向かった。そして長らく熊本に住み続けている叔母さんを頼りに、代々お世話になっているお寺、本家の近くに住む父のふた従弟のおじさん、地域の図書館や資料館を訪ねてまわった。

詳しいことは省くが、この旅で私の心に染み入ったことが 2 つあった。

熊本入りしてしばらく、家が点々としかない国道を走る。旧実家の近くまで来ているように思いつつも道に迷ったときのこと。道を尋ねるため、車を停めて一軒の家で場所を尋ねた。

玄関のドアを開けて「ごめんください」と何度か声をかけると、70 代くらいの細身の男性が出てきた。「野中と申しますが」と前置きをして、まだ会ったことのない親戚の名前を告げて、心当たりを尋ねた。その話の中で父宏典の名前を出したところ「宏典くんの息子さんかい」と、その場で立ち話になった。聞けばこの方、父の 1 つ上の年で同じ学校に通っていたとのこと。見ず知らずの私に懐かしげな笑顔を向けていただけたことが印象的であった。

その後、ふた従弟のおじさんの家を訪ねてお話を聞き、旧野中家のすぐ隣にある地域の納骨堂を見に行った。その際、おじさんから「父の 1 つ下（おじさんの同級生）の久住さんが旧野中家を購入して住んでいる」と聞き、おじさんの仲介でお会いして、話のなりゆきで久住さんのお宅（旧野中家）に入らせていただいた。

その家は、私が約 40 年前に入ったときと変わらず、物が増えたこと以外は時間が止まったままのようであった。4 歳当時、1 歳上の従兄（男の子）と 1 歳下の従妹（女の子）と一緒に戦隊ヒーローのサンバルカンごっこをした仏間や、テレビアニメのニルスの不思議な旅を見た奥の部屋など、記憶が蘇るほどにそのままであった。

その際に、久住さんから取れたての焼き椎茸をご馳走になり、家の中の案内までしていただいた。「この玄関の梁、立派でしょう。これだけの木は今じゃとれないよ」と、家の気に入ったところを語る久住さんの言葉の 1 つ 1 つに実感がこもっており、私は感動とも感謝ともつかない、何かこみ上げるものを感じずにはいられなかった。

40 年近くも前に父が（住むことがないであろう）実家を売却し、本来であれば先祖伝来の家と土地が私に引き継がれることなく父の代で雲散霧消したことは、私にとって長年にわたる小さな不満の種であった。しかし今回熊本に足を運び、野中家やその歴史を知る人たちと話をする中で分かったいくつかのこと。それらは大げさに言えば私や家族の今後を照らしてくれる piece のように感じられた。（※1）

多様性

「多様性」という言葉は、なかなかに扱いが難しいと感じることがある。

外国人について日本の報道でよく耳にする語られ方には「（裕福な外国人観光客による）インバウンド消費」、「（日本より賃金が低い国から来る）外国人労働者」という 2 種類がある。どちらも、日本人が豊かになる手段として外国人を利用するような響きがあり、この言葉自体、あまり気持ちのいいものではないと感じている。穿った見方であろうか。

G 7 広島サミットの後の広島ビジョンについて語るサーロー節子さんのニュースを目にした。G7 各国が対立国（ロシア、中国、イラン、北朝鮮など）の非難に終始し、自国の核保有を正当化していることを批判する節子さんの声が印象的であった。自国や友好国を是とし、自国とは思想や政治の枠組みが違う国を非とする。自国の論理で正義と悪を定義して区切ることは、ルソーが言うところの戦争状態、「国家と国家の関係において、主権や社会契約に対する攻撃、つまり、敵対する国家の憲法に対する攻撃、というかたちをとる（加藤　2009）」ことと隣り合わせにある振る舞いではないかと危惧せずにはいられない。

最後に奥野克巳「文化人類学入門」を読む中で驚いたことを紹介したい。高地ニューギニアのある地域では 7 歳から 15 歳頃の男性性を獲得するための儀礼が行われる期間は、男たちの間で同性愛的な性行為が行われているという（ホモセクシュアルな期間）。一方で、その後、男性は女性と結婚するも、他方で少年との関係が続く場合もある（バイセクシュアルな状態）。やがて妻が子どもを妊娠し出産すると、少年との性的関係は解消される（ヘテロセクシュアルな関係）というのである。

また、ベネズエラのある地域では、戦いの標的となる男性の死亡率が高く女性の割合が多い傾向にあるため、一夫多妻制の社会を形成している。結婚した女性は妊娠が発覚すると、その女性は、インセスト・タブー（※2）の範囲を超えて複数の男性を愛人とし、出産後は愛人関係を結んだ複数の父親から食

料をもらい子どもを養うという。またこの地域では、愛人は胎児の健やかな発育によいと考えられているとのこと。

主に先進国と呼ばれる国において性の多様性が語られるとき、「個人の選択の自由」のニュアンスが多分に含まれているように感じている。一方でアジアや南アメリカ、アフリカの性においては「儀礼としての性」、生き残り戦略のための「習俗の性」など、集団における性の多様性が見られて興味深い。

これでいいのだ

漫画家の赤塚不二夫は、満州で特務警察をしていた父のもと中国で生まれ育った。小学 4 年生で終戦を迎えると、ソ連軍の進駐により略奪と暴行の日々の中に身を置き、ほどなく家族とともに日本に引き揚げた。その後、妹の死や父のシベリア拘留や家族離散を経験して、日本で漫画家になった赤塚。著書「これでいいのだ」には、自分のこと以上に、家族のこと、身近な人のことが多く描かれており、それによって赤塚本人の像が浮かび上がっている。

今、家族と一緒に暮らせる日々。今日、食べるものがある食卓。本当はそこに不足はないのだろう。

語句等注釈

※1　人物の名前は野中姓を除いてすべて仮名

※2　インセスト・タブー＝近親相姦の禁忌

引用・参考文献

赤塚不二夫（2008）「これでいいのだ　赤塚不二夫自叙伝」　文藝春秋

加藤陽子（2009）「それでも、日本人は「戦争」を選んだ」　朝日出版社

奥野克己（2022）「これからの時代を生き抜くための文化人類学入門」　辰巳出版

戸部田誠（2022）「タモリ学　タモリにとって「タモリ」とは何か？」　イースト・プレス